

創立150年記念特集

近世能狂言面名品選

「天下一」号を授かった面打

令和5年1月2日～2月26日
東京国立博物館 本館14室



能面 小面
Noh Mask: *Kōmote*
C-1551

150th Anniversary Thematic Exhibition
Masterpieces of Early Modern Noh Masks
The “Tenkaichi” Mask Makers

Tokyo National Museum, Japanese Gallery, Room 14
January 2 – February 26, 2023

Noh theater is a traditional Japanese performing art. It attained its completed form during the Muromachi period (1392–1573), with many new Noh masks produced during this time. Noh became a cherished pastime of the warrior class and this led to soaring demand for copies of famous masks. From 1593 to 1682, the most accomplished replica makers were awarded the name “Tenkaichi.” Their copies would perfectly replicate the originals, from the facial features and inner carving to the maker’s branded seal and any cracks and blemishes. Despite this fidelity, the individuality of these replica masters still shines through in these works.

「天下一」号は、鑄物師、陶工などに与えられた称号で、能面の作者である面打にも与えられました。能が大成した室町時代にはさまざまな能面が創作されました。武家が能を愛好し、嗜みとなる安土桃山時代、江戸時代には、しだいに名物とされる古い面を写すことが盛んに行なわれる「写しの時代」となっています。文禄二年（一五九三）、豊臣秀吉が、面打としては初めて角坊に「天下一」号を授けました。その後、將軍や朝廷から数人の面打に授けられましたが、天和二年（一六八二）には「天下一」号の使用が禁じられます。つまり、「天下一」号はたった九十年ほどの間の限られた称号なのです。後世には、「天下一」たちの作品もまた尊ばれ、写されました。能面の写しは顔立ちだけでなく、傷や面裏の彫り、作者のサインともいえる焼印までそっくりに写すことが多く、「天下一」号の面打の真作か、あるいは写しかの判定は容易ではありません。ここでは、「天下一」号の面打の焼印、サインなどのある面を集めました。写しの可能性がある作品も含め、それぞれの作風の特徴をご覧ください。

天下一河内

河内は井関家の第四代です。名は家重。近世の名人として最も評価が高く、徳川將軍家に招かれ、江戸に住みました。その作風は優美で、筆あるいは布でたたくように色を付け、微妙な凹凸を残すことで、やわらかな肌を表現した彩色が特徴です。生前から現在に至るまで大変人気があり、作例も多く伝わります。

「能面十六」は、平安時代末期の「一ノ谷の合戦」

で討たれた十六歳の平敦盛がモデルです。しかし河内の「十六」の面裏は、「雪の小面」と呼ばれる若い女性の面の裏にそっくりです。この意味が長く不明でした。今年度の調査で、面の上縁中央に針孔があることがわかりました。これは面打が女面の髪を描く際、髪の分け目の基準にするものです。河内は「雪の小面」の写しをやり始め、途中で十六に改作したのでしょうか。



焼印



面上縁中央の針孔



能面 十六
Noh Mask: *Jūroku*
「天下一河内」焼印
江戸時代・17世紀
C-66



焼印



「雪の小面」の写し
能面 小面
Noh Mask: *Kōmote*
「天下一河内」焼印
江戸時代・17世紀
C-1551



能面 小面 面裏

能面 十六 面裏



創立150年記念特集 近世能狂言面名品選 ——「天下一」号を授かった面打——

令和5年(2023)1月2日発行

執筆：浅見龍介 川岸瀬里 撮影：吉岡由哲 翻訳：フランク・ウィットカム（以上、東京国立博物館）、デザイン・制作・印刷：精興社
編集・発行：東京国立博物館 ©2023東京国立博物館 Tokyo National Museum

東京国立博物館が所蔵する 「天下一」の能狂言面

東京国立博物館には、角坊、是閑吉満（一五二七〜一六一六）、友閑満庸（？〜一六五二）、洞白満喬（一六三三〜一七一五）、近江井関家の河内家重（？〜一六五七）、大和真盛（または基満、？〜一六七二）、児玉家を興した近江満昌（？〜一七〇四）の七人の「天下一」の名が記された面があります。同じ面打のものを比べると、共通する点があります。また、「天下一」号を授けられる前後、使用が禁じられた後で焼印を変えたことがわかる面打もいれば、「天下一」を冠した焼印しか知られない面打もあります。これがどんな意味を持つのか、そして当館収蔵品のほかに「天下一越前」「天下一若狭守」などの焼印のある面も知られています。それらの面打が誰なのかなど、今後の研究課題は多く残されています。

天下一是閑

出目は閑吉満は大野出目家の初代。出家後、是閑と号しました。文禄四年（一五九五）、六十八歳で豊臣秀吉から「天下一」の称号を授けられ、九十歳で没しました。「天下一」以前の作は知られません。なめらかで光沢のある彩色が特徴です。面打が自分の作であることを示すために残す鑿跡を「知らせ鉋」といいます。面裏の鼻の割りの下方に刻まれた三本の鑿跡が是閑の「知らせ鉋」です。近世の名人として河内家重と並び称されました。



焼印



面裏

重要文化財 能面 増女
Noh Mask: Zōonna

「天下一是閑」焼印 安土桃山〜江戸時代・16〜17世紀
金春家伝来 C-1572

天下一備後

出目洞白満喬は陸奥国泉藩（現在の福島県）出身。名前は水野谷加兵衛。越前出目家の満永と近江満昌のもとで修行し、友閑の後継者として大野出目家に入りました。寛文十二年（一六七二）に「天下一」号を授けられます。宝永七年（一七二〇）に「武陽住 出目備後大掾入道洞白」と署名した絵巻を故郷の寺に奉納しています。「天下一備後」「天下一淡路」の焼印を用い、「天下一」号禁止の後は「出目洞白」の焼印を使用しました。



焼印



面裏

重要文化財 能面 怪士
Noh Mask: Ayakashi

「天下一備後」焼印 江戸時代・17世紀 金春家伝来 C-1536

天下一大和

大宮大和（一六三一〜七二）は、真盛または基満と名乗り、奈良・春日大社の禰宜だったといわれます。河内家重の弟子となり、江戸に住みました。早逝したため作例が多いとはいえませんが、作風は河内に似て洗練されています。河内の弟子は大和のみで、大和の弟子は知られないため、近江井関家はここで途絶えたものと考えられています。



焼印



面裏

能面 増女
Noh Mask: Zōonna

「天下一大和」焼印 江戸時代・17世紀 文化庁所蔵

天下一近江

近江満昌は、越前出目家の満永の養子となり跡を継ぐはずでしたが、満永に子どもが生まれため独立しました。小型で縁のない「出目」印が、満永のもとで打った近江の面ともいわれますが確証はありません。多くの作例が残るのは、満永にならって工房で制作していたからでしょう。「天下一」号が禁止されてからは「児玉近江」という焼印を用いました。



焼印



面裏

能面 景清
Noh Mask: Kagekiyo

「天下一近江」焼印 江戸時代・17世紀 C-69

天下一友閑

出目友閑満庸は是閑の息子で大野出目家第二代です。是閑の作風に近く、面裏の「知らせ鉋」も同じです。大名家が能面を収集した時期に活躍したため、友閑の面は大名家に多く伝わりました。



能面 鬺

Noh Mask: Shikami

「天下一友閑」焼印 江戸時代・17世紀 C-142



焼印

天下一角坊

角坊は初めて「天下一」号を授かった面打。能に熱狂した豊臣秀吉が能面の収集をするなかで、観世、宝生、金春、金剛など宗家に伝来した名物面の写しを角坊に打たせました。現存する角坊の作例はきわめて少なく、大坂城で多くが焼失したのかもしれない。



狂言面 武悪

Kyōgen Mask: Buaku

「天下一角坊」刻銘 安土桃山時代・16世紀 C-86



刻銘